



## 日の丸の国旗

主幹 倉 橋 惣 三

日本の軍艦が、ハドソンの上流に遡江して、ニューヨーク

市沖に碇泊したときである。丁度リバーサイド何丁目のアパートに止宿していた筆者は、コロンビア大学への往還に、マストの上の日章旗を仰いで、胸の鼓動の高まる思いをした。何んの目的でここに碇をおろしていたのかは知らない。

少くも僕の肩身を大きくさせるためではなかつたに相違ない。リバーサイドブロムナードは、世界各国の人間が散歩している。話しあつている国語の種類にしても実にさまざまである。それを誰れもが気にかけるもしないし況んや、一々国籍詮索の目を向けたりしない。万遍なく吹いて来るハドソンの快い川風を、共にエンジョイしているだけである。その異国人達が白地に赤のシンブルな意匠をどう見て通るかは分らないし、君あれを見て呉れと自慢して指し示す訳でもないが、これが、自分の国のシンボルだという気もちは、——そうしてその気もちを、同じ日本人と語りあいたいというような気もちは、自然と抑え難くなる。深い共同心が、誰れも禁じ

られないものである。

筆者は、その後、ジュネーブの国際連盟本部の前で、あの静かな湖辺に、立てならべられてある連盟諸国のとりどりの国旗の間に日の丸を見、深い感慨に耽らされたことを思い出す。その平和美の印銘は、今でも心を去らない。

こないだの敗戦降伏期中、何が悲しく、何が堪え難いといつて、連合国総司令部の特別の許可なくしては、国旗掲揚のできなかったこと位、骨髓に徹する羞恥はなかつた。今でこそ大きな声でいうが、筆者は時々その禁を冒して、後庭に日章旗を立てた。そうしなければ、日本人だという、幼時から日の丸の旗に直結している心もちが、満足されなかつたのである。あの時その犯が見つかつたら、果してどうされたとか、今にして思えば、過ぎ去つた夢の中のこのようであるが、国家的公事としてではなく、一日本人としての私情からの、己むに己まれぬ心としては、戦勝国人も、それ／＼の自

国の国旗を有する文明人として、まさか、此の小さい日本人の一家を、打首晒首の暴刑には処さなかつただろうと思う。戦前から筆者が幼児らのために作り唱わせていた、晴天日の出の日章旗のポエトリーは、国際公法には何んの関係のあるものではないと思う。

その日の丸の国旗を、心のまゝに、大ぴらに掲げていゝ今日になつて、それを仕舞いなくしていたり或は、意識的に風呂敷に利用(?)したりして、失つていた家があつたりした。そのため、国旗の日の町の軒々が、淋しかつたりした。日本人として、がまんし難いことであつた。幼稚園にそんな、なさけないところは「決して無かつた」と信ずるが、子供達の中には、国旗を知らず、日の丸を知らないものが随分あつたかもしれない。日本の子供に日本の国旗を知らなかつたことは、一体誰れの罪だつたろうか。被占領者の責任というべく、余りに、なさけなく、余りに悲しいことであつた。国旗も布である。戦災に焼失するのも己むを得なかつたかも知れぬ。それは最も残念のことであつた。がその後六年、家に国旗なくして平気(?)でいたことが、日本人として、思えば平気なことではなかつた筈ではあるまいか。それで、独立平和の日を日夜に、心から待つていたと、ほんとうに言えようか。

過ぎたことは多く言ひまい。今日になつては、どこにも必ず国旗はある。国の祝日にはきつと掲げよう。幼稚園が休みでもできるなら宿直の責任で掲げよう。更に、子供たちを通して、親達に、家毎に立てるように勧めよう。若し、所蔵していない家があるとしたら、P・T・Aの仕事としてゞも、即刻それを促がそう。他のことは、各家の流儀で、一律でなくともいゝ。一律でない方がいゝこともある。しかし、国旗を立てることは、日本中、各戸一齊にしよう。国旗の寸法には、きまりがある筈だが、そういうことは、まあやかましくいわないでもいゝとして、無旗では国の祝日の心がしない。子供の入園、入学の日にも、是非町中そろつて、日の丸の旗がひらめいているのだつたらというのが筆者予ての持論でもある。入園入学の日は、卒業の日と共に、立派に『国の子どもの日』ではないか。

国旗は日本国のシンボル日本人一人々々の心のシンボルでもあつていゝ筈である。筆者は万国児童保護大会の日本委員として、国からブラッセルに派遣されたことがあつた。そのときホテルが、特に日の丸の国旗を屋上に掲げて呉れたが、筆者個人へのエチケツトではなく、日本国へのエチケツトだとして、心から嬉しかつたことを思い出す。国内に於てだつてそうでありたい気がする。

欧米諸国の子供らに、如何に国旗親愛の風が強いかは、人

の知るところである。欧米でしているからそれを我國の子供にも手習わせようというのではないが、その諸国の国旗愛重の風習が、狭隘な超国家主義の遺風（一）でもなく、非平和心養成の下ごころでもないことは、いうまでもない。自分の国のシンボルへの親愛のこころだけである。特に理由あつての愛国心という程のことでもなく、子供心の、幼時からの喜びである。自国への親愛の至情は、決して咎むべきでなく、排すべきでもない。

国旗が戦争のときの旗印として、国旗が敵対感情の挑発の具に供せられ、狭隘激越な敵愾心の興奮剤に用いられたことがあるからといつて、自分の国への親愛の至情の発露をも難んずるのは、所謂『葵に懲りて藎を吹く』の、古い支那の故事に似た、浅薄、皮相の愚ではあるまいか。国旗を見れば、

自分の国への親愛の感情よりも、常に他国への仮想敵対感情がむら／＼として来るものがあつたとしたら、敵をも愛する心が弱いというよりも、自分の国を愛する至情が弱といふべきでなからうか。敵対感情の旺盛と、熾烈を以てのみ、勇敢な愛国心として慣らされていた国民は、純粹な人間の至情としての愛国心そのものに慣らしかえられなくてはならぬのでなからうか。

幼児の純な心を、純な愛国心に育てることは、われら幼児教育者の最も幸福な任務ではなからうか。そして、それが幼児教育者のもつ愛国心でもあるまいか。

日本中の幼児に、日の丸の国旗を親しませ愛させよう。

## 新年の賀詞を申し上げます

昭和二十八年一月

日本幼稚園協會